

〔佳作〕

北海道と北欧に見る 人間と自然の社会学

伊藤 隆一

千歳空港を飛びたった旅客機で北に向かう時、日高連峰の果てしないほどにつづく樹海の上を通過する。山のうねりいっばいに緑の様相が、美しい自然の妙を演出しているかのように広がっている。四季折々の季節に、その緑色は赤、黄、黒とダイナミックに変化して、北の大地の恵みを空の上から充分に滴喫させてくれる。北海道ならではの雄大でドラマチックな光景と云えよう。

その風景に接するたびに、北欧のフィンランドで、首都のヘルシンキから北へ向かう時にも受けた同じような感動が甦える。高い山に連なる緑ではないが、見渡す限りに広がる平地に、日高連峰と同じような美しい緑が連なっていた。

それは同じ北方圏の自然であり、色彩であった。北海道の緑とフィンランドの緑のイメージが重なりあって、空の旅を一層楽しませてくれた。その緑を見ながら、ふと、素朴な疑問が湧いたことを想い出す。両方とも、よく似た自然条件を持つ風土から生まれた緑であるが、その自然に対して、そこに住んでいる人たちの接し方は同じなのだろうか。又、共通した意識を持っているのだろうか――。

フィンランドは、北緯六十度以北の国である。この国の人たちは、自分たちの国の呼び方を「スオミ」(SUOMI)と云っている。日本人が日本のことを「ジャパン」と云うよりも「ニホン」とか「ニッポン」と呼んでいるのと同じである。

オリンピックなどのスポーツの国際大会に参加する選手も、ユニホームに(SUOMI)

の文字を並べている。毎冬に、札幌大倉山のジャンプ大会で活躍するフィンランドの選手は胸の国名も「スオミ」で、北海道のファンにとってはなじみの呼び名となっている。この国を訪問して「フィンランド」よりも「スオミ」の方を使うと、相手の親愛の情がより深くなること間違いない。

そのスオミを、この国の言葉に訳すと「森と湖」となる。まさしくこの国を象徴するにふさわしい意味あいがある。わが国の四国を除いた面積の国土に、六万の湖が点在し、そのまわりをうっそうたる森林がとりまいているからである。世界有数の森林国としての風格が、この五文字に生きている。

自分たちが住んでいる国の名を、このように具体的な表現で呼んでいることは、緑への高い意識に通じていよう。わが国も世界の森林の仲間入りをしていて、同じように豊かな緑に包まれているが、国の名に用いるほど積極的ではないようだ。

この「森と湖」の国を象徴する言葉に、「緑の黄金」(グリーン・ゴールド)がある。この国の緑の資源は、黄金よりもまさるとの意味である。又、「フィンランドの緑は、他の国の黄金に相当する」と云う価値感も合せて表現している。工業の少ない国であるが、それに代わって木材資源を活用することによってフィンランドの経済を支えている。まさしく「自然立国」である。

フィンランドという国を深く知れば知るほど、国民の文化、生活のすべてが、自然そのものと密接に結びついていることがわかってくる。緑の自然と市民生活が不可分の関

係にあるのだ。

私たちの北海道も、同じような基盤をもち、道民は緑の自然を背景にして生活している。しかし、「両者には大きな隔差、相違点があるように思えてならない。それと考えてみよう。

「緑の黄金」の里諺をもつフィンランドは、国土(三十三万七千平方キロメートル)の五十七％が森林に覆われている。一方、北海道では六十五％、全国平均でも六十六％が森林だから、こちらの方が兄貴分になろう。さらに、北海道は北緯四十二―四十五度の亜寒帯なので、森林には広葉樹と針葉樹が混在し、植物相は極めて多様である。これに対し、フィンランドは、北緯六十度以北に位置し、国土の三分の一は北極圏(北緯十六・五度以北)にあつて不毛に近いことから、人間が居住している地域における森林の量は、北海道より上回っていると考えていいだろう。

北緯のイメージは、湖と森につながるが、かといって必ずしも森林が育ちやすい理想の風土というわけではない。北欧全土の地盤は、氷河期時代の爪あとによつて氷河が削られた岩盤が出来ている。花崗石の上に薄い土の層が覆っていると云つてもいいほどである。至る所で、岩が露出している風景に出会う。島の真ん中にも、町の学校の校庭にも大きい岩がのぞいている。地下鉄は、その岩盤をくり抜いての難工事。どこもかしこも堅い岩盤だらけである。

その岩の上の薄皮のような土の層に木が育っている。だから、根の深く張る樹木は育たず、針葉樹のような根の浅く広がる樹木が多い。その種類も限られている。しかも、極寒の自然である。北海道の中央部から北部にかけての冬の気候を上回る厳しさである。太陽の出ない厳寒の冬の自然。逆に、太陽の沈まない白夜の夏。極端な違いを見せる北欧の一年のサイクル。その条件に合わせた最もふさわしい管理が、この国の宝を創っている。

針葉樹の生長のスピードは、一年にわずか一ミリメートルの幅の年輪を増やすだけである。それは、私たちの風土とは比較出来ないほど遅々としている。この国の人たちの木に対する慎重な配慮は、この成長のスピードに由来しているのではないかと感じる。自然との斗いの中で徐々に育まれた樹林は、固くて良質な材質をもっている、という理解があるからである。さらに、その資源が自然の年月の結晶であり、天からの恵みで

あるとの認識を持つている。

針葉樹の多い風景は、北国の雰囲気を感じ上げてくれる。この国の針葉樹は、貴重な財産であるばかりでない。市民の生活に直結し、同居している。北欧の童話に、森や木を舞台にしたものが多いのもそれを物語っている。実生活の上でも、緑との触れ合いは、赤ん坊の時から始まっている。

公園や林の中に、乳母車がなげなく置かれていた光景によく出会う。乳母車の中では小さな赤ん坊が、気持ちよさそうに眠っている。木陰の昼寝である。私たちの周辺では、見られない情景だ。しかし、北欧では、この育児法は生後十日目からの習慣となつていて、珍しいことではないのだ。

「ちよつと乱暴すぎないか」と首をかしげる私に、友人の一人は、こともけなげにこう云つた。「自然の空気の中で寝かすのが子供には一番いいんだ。緑の香りが、子供たちの神経を最も安定させるんだよ。」

一般的に、育児には三つの欠かせない気配りが必要と云われている。一つは、豊かな栄養を与えること。次には、十分な睡眠を保つこと。そして、新鮮な空気を与えることである。第三の新鮮な空気は、中でも大切な配慮である。木立ちの中での午睡が重視されているのは、そこには木の葉からもたらされる新鮮な酸素が満ちあふれているからである。

私たちは、子育ての時に、栄養と睡眠には気を付けているが、新鮮な空気は、となると自信がない。自然が豊かな北海道に住んでいても、この第三の配慮を忘れていた場合が多いのではなからうか。身近に「宝物」が存在しているのに、それを認識して生活にとり込んでいくか、という心もとない。その点では生活の中に自然の恵みを的確に生かしている北欧の人たちの知恵には頭が下がる。ここにも、緑と密着した生活の歴史の重みを感じる。

地元の人たちに聞くと、緑の中の睡眠には、もうひとつの効用があると云う。赤ん坊の時から、自然の子守唄を聞かせることによつて、情操の安定と発達に役立てているというのである。その「子守唄」とは、風にそよぐ木の葉のざわめき、小鳥のさえずり、川のさざめき……と云つた自然の音のことである。これ以上に心をやわらげる音楽は無

いという。自然との触れ合いが、空気や水と共に音の領域にまで及んでいるのだ。緑をまるごと栄養にして育てられる子供の感覚が、潜在的に生かされて、それが北欧の人たちの自然観の原点になっているのかも知れない。なにげなく緑の中に置かれてる乳母車に、北に住む人間の生活の哲学さえ感じられた。

都会の子供たちも、田舎の子供たちにも共通して触れ合う場所は森林である。この国においては、わが国で流行になりつつある「森林浴」という言葉は死語に近い。生活そのものが、自然の中に融け込んでいて、作爲的な運動ではないようだ。

学校教育においても、森林と接する時間が多く持たれている。わが国と違って、地方自治体（コミュニティ）が、それぞれの地域に適應したカリキュラムを設けている。自然に恵まれた学校では、積極的に学校教材に採り込んでいる。横の連係を教科で結びつけて、授業が組まれているのも特色である。

例えば、ある学校では、歴史や地理の授業は、木と人間の相互関係から出発して、国語や演劇の授業も木を中心に展開していた。理科も、森に行つて、葉を集め、構造や機能を観察する。その後、それらの知識を総合し、森のイメージを造型的に平面構成させるという美術の授業に結びつけている。

樹木という素材を多様な方面から集約的に取り上げて、生徒の関心と教養を実践的に組み立てて行く効果的な学習法である。フィンランドでは小学校の低学年生でも、森の中に迷い込んでも、葉の繁り具合や枝の伸び方によって、東西南北の方向を見分けられると云う。小動物の動向や自然界のルールの観察によつても、位置や方角を的確に察知する習慣を身につけている。森林を媒体にして育くんだ生活文化の姿をかいま見る思いがしたものである。

オリエンテーリングは磁石と地図を手掛りにして森の中のポイントを正確に通過して行く競技であるが、深い森を的確に回遊するには基本が必要である。その基本とは、自然に対する深い理解と冷静な判断力である。それには、幼い時からの自然に対する洞察力が要求される。その積み重ねが、このスポーツをより有用的にする。日本の友人から、北欧のある地域のオリエンテーリングに参加しようとしたが、地元の人たちの技量を見て遠慮した、という話を聞いたことがある。当然だったかもしれない。幼児から自然を友達として育て来た人たちの教養と知識の高さが、山野の探索能力を競うオリエンテ

ーリングという競技を創つたのであろう。

人々は夏に汗を流した森林で、冬期間は、異なった汗を流していた。常緑の針葉樹林の中の白い雪の上をスキーで走っている。どの森林も格好のコースとなる。まずは、森の中には必ずコースがあると思つていい。コースの進路を示す色が、幹に記されている。その色の数の多いのを見ると、森の中がこの国の人たちにとっていかに大切な生命の舞台かが理解出来る。

深い森は、夏には奥まで入るのに限界があるが、冬にはスキーをはいて奥まで行ける楽しみがあるという。「夏には行けなくても、冬には、さあ森の奥まで遊びに行つていらつしやい、と神様が白い橋を渡してくれる」と語る。

夏はオリエンテーリングで、緑に包まれて汗を流し、冬には白い舞台を走り廻る。北にしかない自然の恩恵を心から謳歌している。自然と生活を見事に結びつけているしたたかさには舌を巻くばかりだ。私たちの環境とよく似た森林を、遠くから眺めるだけの緑の集落としてではなく、人生の舞台として活用している様子を目の当たりにするたびにショックを受けたものである。この親密さが、自然保護の精神につながっていることは間違いない。自然イコール生活そのもの、なのだから――。

北欧の人たちの生活と自然との密接な結びつきを述べてきたが、その関係は、私たちの自然とのつきあい方とは比較にならないほど積極的に緊密である。人間と自然・風土が精神的に結びついている、と云つても過言ではないだろう。

厳しい北欧の冬は、半年にわたる。大西洋を北上する暖流の影響によって、高緯度の割には気候は温暖ながら、北海道より十五度以上も北にあるこの地域の冬將軍は、時には生命の存在さえ拒否するほどの猛々しさを見せる。冬期間の日照時間は極端に短く、白夜が続く夏とは裏腹に、日中でもほの暗い日が続く。

十二月の冬至の頃は、午前十時ごろにようやく明るくなったかと思うと、午後一時を過ぎると夜のとぼりが下りてしまう。その短時間の日中も、空は厚い雲に覆われて、太陽の姿はめつたにお目にかかれない。そんな天候が数ヶ月続くのである。こんなうす暗い光の中で動植物が生き続けられるのだろうか、と不安に思うほどである。

湖も海も凍りつき、陸地と水面が白い平面となつてつながり、広大な銀世界となる。

暗さと身を切る寒さが、北欧の冬の特徴である。北海道の冬は、寒さと雪の量では、北欧にひけをとらないが、日照時間は格段に多い。根釧地方は、日本中でも一番晴れの日が多いと云われるほどである。北欧が「暗い冬」とすれば、北海道は「明るい冬」と云えるだろう。珍らしく太陽が雲間から顔をのぞかせると、北欧の人たちは、争って戸外へ飛び出し、東の間の日光浴を楽しむ。新聞の天気予報欄に、「日照予想時刻」なるものを見つけて、驚き、うなづいたことがある。

その「太陽への飢え」は、春を待ち望む心を募らせる。冬から解放される五月、人々の歡喜が爆発する。北海道で梅と桜が同時に咲くように、北欧でも野山のすべての花が一斉に咲き乱れるからだ。森や林の中は新緑を求める人々でにぎわう。その表情は生き生きと輝き、春の訪れを満喫している。

白樺の枝先にも、新しい緑が芽生える。若々しい生命力がみなぎるその若葉は、白く幹と美しく調和して、北欧の野山を新鮮に染め替える。このシーズンが北欧の四季の中で最も心を浮きたたせてくれる。

人々は、白樺の若葉を、野や山で見て楽しむだけで満足しない。蕾の枝を切って持ち帰り、自宅や職場などの至る所に飾って、野山より一足早く葉を開らせて、春の訪れを祝い合う。私たちの習慣では、春の象徴は花で表現されるが、北欧では、白樺の若葉が主役になる。

学校や病院の玄関には、大きな容器に、ひと抱えもある白樺の小枝が飾られる。家庭でも、みずみずしい若葉が花瓶に生けられ、花の量を圧倒する。自動車のフロントにも船の舳先にも、しめ飾りのように縛られる。教会の祭壇にも、レストランのテーブルの上にも……どこもかしこも黄緑一色になる。

野山の新緑が、人々が生活する家や町をも埋め尽くすわけである。私たちの場合は、白樺の若葉を美しいとは思っても、北欧の人たちのように、あちこちに生けて飾るほど積極的ではない。

それは、自然の美しさを生活の中で賞する時、花の方を主に考え、木の葉などは従とする感覚が根づいているためかもしれない。伝統的な美的感覚の違いでもあるのだろうが、花や葉に主従をつけず、自然をそのまま生活にとり込んで楽しむ、とする北欧の人たちの考え方は、私たちより素直で素朴な姿勢と云えるかもしれない。

人間の生活に不可欠な仲間として、緑が育てられている。この意識は、北欧だけのものではない。日本人も木を中心とする文化や生活を育んできた。

娘が生まれると、庭に桐の苗木を植えた。娘が成長して嫁ぐとき、大きくなった桐の木を切って、簾笥や長持ちなどの嫁入り道具を作ったと云われている。子供と木の年輪の生長を同じサイクルで考えていた先祖の自然観は、現在でも学ぶことが多い。

自然保護という考え方は、ただ緑や自然景観をそのまま残せばいい、ということではない。自然界の摂理は、生まれ出たものは、いずれ朽ち果る、生死の輪廻に基づいている。生命がやがて朽ちるのは宿命であるが、同時に新しい生命が誕生して、生命のエネルギーは受け継がれてゆく。

無計画な乱伐や自然のルールを無視した開発行為は、生命の連鎖を断ち切ってしまう。自然保護を考える上で大切なことは、将来を見通した国土開発計画の中に自然の生命連鎖のルールを織り込むことであろう。このことは先人の知恵の中に生かされている。

わが国には漆工芸という世界に誇る美術工芸が確立されている。その素材の漆液は、漆の幹から採集する樹液である。その木が大きくなって漆液の量が減ると、新しい木へ更新していった。江戸時代には、古い木を一本切ると、必ず新しい木を三本植えるように決められていた。貴重な漆液を絶やさなため配慮である。また、百本以上の漆の木を保有すると、武士と同じように帯刀が許された。自然の恵みを守る心得が、素晴らしい材質を作り、それによって、華麗な漆工芸の発達と伝統を支えていたわけである。

自然保護は、守るものでも、攻めるものでもない。自然をかがえのない天の贈り物と認識することから出発するものだろう。

私が日本から持って行ったマッチを見て、フィンランドの友人は、びつくりしていたの思い出す。軸棒が長かったからである。この国のマッチの軸は、私たちがふだん使っているものの半分にも満たない。木で生きている国にして、この節約ぶりである。

ラーメンやそば一杯を食べるのに、使い捨ての割り箸を使っていることを知ったら、彼らは何と云うだろうか。その割り箸用の木が育つのに約三十年かかる。これを、日本の「伝統的な浪費」とは考えたくない。そのために、木材の有効利用がおろそかになっているとしたら、本末転倒である。

木の豊かさを当り前と考えて、情性で伐採を続けているうちに、世界有数の森林国であつたのが、木材を輸入しなければならぬ身に落ち込んでしまつたのは残念である。

木との触れ合い、木の正しい用途を考えると、わが国の現状に多くの矛盾を感じる。森林に恵まれている地域に行つても、公園にある遊具の大半が金属製である。形も機能も画一化していて、面白味も独創性もない。北欧では、野外遊具はほとんど木製で、金属製品を見つるのは難しい。

北方圏の冬の気候を考えれば、木を使うのが当然である。金属なら冷たい上に、マイナス十度以下に冷え込むと、幼児の皮膚が付着してけがをする恐れがある。固い感触は、子供の敏感な触覚になじまない。なお、金属表面の塗装膜がはがれて、子供の柔かい皮膚を傷つける、とも指摘されている。北欧の国々で木製遊具が使われているのは、危険防止と同時に木の持つ自然のぬくもりが子供たちの遊ぶ意欲を高める効果があるからである。安易な方法で木の材質を選んでゐるのでない。

木材の豊富な北海道でも、木製遊具よりも金属遊具をわざわざ配置する無神経さは、木に対する認識不足と、用途研究の貧困だけでなく自然環境への本質的な取り組みがなされていないことを、端的に表している。

北欧の国々が、こぞつて良質な木製遊具を製造して、世界中に輸出し、子供たちに喜ばれて高い評価を受けているのに対して、同質の材料を抱えている北海道の現状は、あまりにも差が大きすぎよう。地場産業の育成は、掛け声だけではだめである。地場資源への深い認識と研究があつてはじめて展望が開ける。

それぞれの土地の気候や風土に即した生き方が「文化」である。植物の生態にしても温帯圏と寒帯圏では、極端な相違がある。地域の自然に適合してこそ個性を形成するのであつて、人間の生活も同様である。しかし、私たちの生活は、自然に即した文化を背景に発展してきたが、十九世紀以降、物質文明や機械文明が、はばをきかせている。ここでは、遠からず、人類は危機に瀕するであろうと、学者は警告している。それは、自然と調和した精神文化から物質文化への急速な移行によって人間性が失われてしまつたためでもあろう。

北海道においても、目先の繁栄を急ぐあまり、本質的な思考と、将来的展望を議論す

るプロセスが今一つ不足しているのではなからうか。人類の向かう行き先と、現実との接点が、今一つあいまいである。

北欧の例を中心に考えてみたが、これは、あくまで参考例であつて、必ずしも同列に論じることが出来ないかも知れない。わが国のように山林が多い地形と、北欧の平地での緑の森とでは、人間と自然の接触の度合いが多少とも違つてもこよう。しかし、諸条件の違いがあるとしても、人間と自然との調和や共存に対する人びとの心がまえは同じであつていいはずだ。特に、北欧と北海道とは同じ北方圏に位置していて、自然・気候などがよく似ているからである。北欧を自然保護の先輩として謙虚に学ぶことがまだまだありそうである。

北欧の歴史は、森を切り開いて耕地を広げることから始まつた。私たちの先人も、千古の森に鉦を入れる苦勞から出発した。そして百年を経過したが、北欧の歴史は、約八百年前からの自然との闘いであつた。その歴史の蓄積の中から、人々は人間と自然との調和と協調を学びとつた。緑は財産であり、人間を守り、すべての生命を育てるかけがえない天の恵みであることを知つた。

私たちは、歴史が浅いこともあつて、そこまで到達していないのは惜しまれる。だが、この次元に立ち、まだ若い北海道の新しい自然環境づくりを真剣に考える必要があろう。恵まれた北海道の自然環境の中に生活出来る喜びを認識して、自然に対する関心をより深めることが切望される。美しい自然を愛する人たちの数が、その可能性を裏づけることだろう。理想の環境づくりのためには、一人の百歩前進でなく、百人の一步前進から出発したいものである。

その意識と心構えを、世界に誇るような文化が創造される可能性を持つ北海道の土壤に定着させなければならぬだろう。北に存在するが故に与えられた天からのたまものより豊かなものにして、次の世紀に橋渡しをしたいものだ。

あの空から見た限りなく広がる緑の色彩が、この北の大地に永遠に続き、その中で自然と人間の調和と共存が悠久に結びつくよう、北海道に住む一人一人の精進を期待して止まない。国際森林年の記念すべき年に、この夢を大きく育てたい。

この地にも「緑の黄金」を。